

聖書：ヨシュア記2章1～14節

説教題：救いください

### 1 ふたりの斥候

ヨシュアは神の励ましを受け、ヨルダン川の向こう側に見えるカナンへの地に入る決断をします。その準備として、エリコという町に偵察隊を派遣し様子を探らせます。エリコはヨルダン川の西側、これから向かおうとしている約束の地の入り口にある大きな町です。そのエリコの町を占領できれば、約束の地に入る大きな足がかりを築くこととなります。

ヨシュアから遣わされたふたりの斥候は、人混みに紛れてエリコに入ります。そこで向かったのがラハブという名の遊女の家であったと書かれています。なぜそんな家に入ったのでしょうか。きちんとした目的があります。エリコがどん町であるのか、身分を知られることなく短い時間に確実な情報を集めるためにどうするか。人が集まる場所に行くのが一番です。お客商売をしている宿屋こそ、情報の宝庫です。ラハブはおそらくそんな宿屋を営んでいた女将ではなかったのかと、私は想像しております。ふたりの斥候がラハブの家に真っ先に向かった理由はそのためでした。

### 2 偽りの証言をしてはならない(出エジプト記20章16節)

いつぼう、エリコもイスラエルの侵入に備えて警戒を強めていたようです。スパイが侵入してきたとの情報をキャッチします。すぐさま警察がやってきてラハブを尋問しまし

た。これに対しラハブはこう答えます。「その人たちは私のところに来ました。しかし、私はその人たちがどこから来たのか知りませんでした。その人たちは、暗くなって、門が閉じられるころ、出て行きました。その人たちがどこへ行ったのか存じません。急いで彼らのあとを追ってごらん下さい。追いつけるでしょう。」まるで、映画の一場面を観ているようなシーンです。ラハブは、事前にふたりを建物の屋上にかくまっていました。居場所を知っています。でもラハブは警察に対し、自分は知らないと言うのです。

このことをどう考えたらよいのでしょうか。ご存じのように、モーセの十戒の九番目にこうあります。「あなたの隣人に、偽りの証言をしてはならない。」ラハブは偽りの証言をしたのですから、これは罪ということにならないのでしょうか。先回りして結論を言えば、ラハブがしたことを神がとがめることはありません。むしろ逆に、ラハブの態度を非常に高く評価しているのです。

このことをどう考えたらよいのでしょうか。神の計画のためなら、時と場合によっては嘘をついてもよい、ということでしょうか。世間でも言われるように、「嘘も方便」ということで、ときには嘘も許されるということでしょうか。その事は最後に触れます。

### 3 ラハブ

#### (1) イスラエルに関するうわさ

ラハブのことを考えてみます。ラハブの耳

にはすでにイスラエルの民のことについて、いろいろなことが聞こえてきていました。四十年前、エジプトからイスラエルの民たちが脱出したとき何が起きたのか。葦の海の水がかれて、そこを渡って奇蹟的に脱出していったこと。シホンとオグのことを聞いています。このふたりの王は、いずれもイスラエルの民たちが荒野を旅していたときに、イスラエルの行く手を邪魔し、情けをかけようとしなかった王たちです。彼らは神の手によって死んでいきます。

そのイスラエルが、いまヨルダン川を渡りエリコを攻めて来るだろうと誰もがうわさをしていました。そうになったらどうなるか。店に集まってくる人々の会話が耳に入ってくる。「人々は恐怖に襲われており、震えおののいている。もう勝ち目はない。どうしたらいいのか、右往左往している。」

## (2) いのちをかけた選択

聞こえてくる情報を総合すれば、ラハブはエリコは負けることになるだろうと直感しました。負けると言うことは、ここまゝエリコにとどまれば自分も殺されることを意味します。では逃げるか。自分だけひとり逃げられるわけにはいきません。ラハブには家族がいました。家族だけではなく、親戚もいました。彼らのことを助けたいと思いました。でもどうしたらいいのかわかりません。そんなふうに悩んでいたとき、不思議なことに自分の店にイスラエルの斥候がやって来ました。長年の勘で、ふたりが変装しており身分を偽っていることを見抜きました。ラハブはここで、二つの選択に迫られました。このふたりのことを警察に通報するのか、それとも思い切ってイスラエルの側につくのか。その二つです。

エリコの警察に通報すれば、ふたりの斥候は逮捕されます。エリコを危機から救うことになります。エリコを守った功労者として人々から賞賛されるでしょう。

一方、もしここでイスラエルの側につくとするならどうなるのか。いろいろなリスクを背負い込むことになります。まず一つ目のリスク。ふたりの斥候が自分を本当に救ってくれるのかどうか、何の確証もありません。あとになってから「あなたのことなど知りません」と言われてしまったら、もう終わりです。

二つ目のリスク。エリコの警察に嘘をつかなければなりません。もし嘘がばれて、イスラエルの斥候をかくまったということがわかれば、自分のいのちはありません。ラハブはこの二つのリスクを背負わなければなりません。

どちらの選択が有利でしょうか。リスクの少ない方を選ぶ。それがこの世の常識です。ですから、エリコの警察に通報する。これがラハブにとって最も安全で確実な選択になるはずでした。しかしラハブは、エリコの側ではなく、イスラエルの側につくことを選択します。高いリスクを承知の上で、いのちをかけて決断します。なぜ、そうしたのでしょう。その事を次に見ていきます。

## (3) 真実を尽くす

それまでラハブは、聖書のみことばを聞く機会はなかったでしょう。神が奇蹟を起こされたところも見ていません。イスラエルの神を信じなさいと熱心に伝道されたのでもない。ラハブがイスラエルの神について聞いてたのはすべてうわさを通してです。そんなラハブがこう言っております。11節後半。「あなたがたの神、主は、上は天、下は地におい

て神であられるからです。」

さあこれをどう評価すればいいでしょうか。意地の悪い見方をすることも可能なのです。ラハブは信じてはいないけれども、イスラエルの人たちを喜ばせ、そして自分と自分の家族が助かるために、口からでまかせで言ったのではないか。

では、ブが12、13節で語っていることはどうなのでしょう。「どうか、私があなたがたに真実を尽くしたように、あなたがたもまた私の父の家に真実を尽くすと、今、主にかけて私に誓ってください。そして、私に確かな証拠を下さい。私の父、母、兄弟、姉妹、また、すべて彼らに属する者を生かし、私たちのいのちを死から救い出してください。」

ラハブがこのように語った相手は、ふたりの斥候です。でも、ラハブが今ここで見ているのはふたりではないように思うのです。ふたりの斥候が送られてきたイスラエル。そのイスラエルの神に対して、あたかもラハブがひれ伏しながら願っている。そのような真剣な祈りに聞こえないでしょうか。ラハブは自分ができる限りの真実をイスラエルの神に尽くしたと言っています。

それもラハブの出まかせだったのでしょうか。いいえ。先ほど見たように、ラハブはいのちをかけていました。危険を承知でエリコの警察には嘘を突き通したのです。そうやって、自分を犠牲にしてふたりの斥候をかくまい、守り通そうとしています。確かに、ラハブは真実を尽くしています。生きるか死ぬか。自分のいのちを神の前に差し出しています。

そんなとき、相手を喜ばせるために思ってもいないことをべらべらと言えるでしょう

か。いいえ。人間命懸けのときは、心の中にあることをあらいざらいそのまま出すのではないですか。ラハブは、確かにイスラエルの神こそ、本当の神であると受けとめています。この神はもしかすると自分と自分の家族を救ってくれるのかもしれないと、最後の望みをかけようとしています。

#### 4 真実と誠実を尽くす神

ラハブの願いを聞いたふたりの斥候は14節でこう応答します。「あなたがたが、私たちのことをしゃべらなければ、私たちはいのちをかけて誓おう。主が私たちにこの地を与えてくださるとき、私たちは真実と誠実を尽くそう。」

12節の「証拠」と訳されていることばが「誠実」と同じことばであることに注意してください。そうすると、12節と14節で「真実」と「誠実」ということばが何度も繰り返されていることに気がつきます。ラハブもふたりの斥候も同じことばを語るのです。なぜ「真実」と「誠実」にこだわるのでしょうか。「真実」と「誠実」こそ、私たちが生きるいのちの根源にあるものと信じているからです。真実を尽くす者に対して、神は必ず真実と誠実をもって報いてくださる方であるとお互いが信じているからです。だから、ラハブの真実を尽くそうとする態度を見て、ふたりの斥候は、ラハブとの約束を確実に成し遂げなければならないと誓います。

ラハブは外国人で、それも遊女という身分です。けれども相手が遊女だからとか、相手が悪だからとか、そんなことは、神の救いの前ではまったく関係ありませんでした。どんな者であっても、真実と誠実を大切にしようとする者であるなら、すべて神の救いに招か

れているのです。

人間の目で見ると、ラハブは偽りの証言をしたようにしか見えません。しかし、神の視点から見ると、評価はまったく変わりません。ラハブは自分のいのちをかけて、神の前に真実を尽くそうとしていました。ラハブは、自分の隣人としてやってきたふたりの斥候に対して真実の証言をしていたのです。神はそのことを見逃しません。のちに、イスラエルがエリコに攻め入るとき、主はラハブの信仰に応えます。ラハブとその家族に真実と誠実を尽くし、彼らを救い出します。

嘘をつくとかつかないとか、そんな単純なことではありません。いのちを捨てても真実と誠実にこだわり続ける。それが「あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない」の本当の意味であろうと思います。ラハブは、モーセの十戒を破ったのではなく、守り通すためにいのちをかけました。その結果救われていきます。神がヨシュアに告げていたことを思い出します。「わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行え。」「それは、あなたが行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである。」(1章7節)

救い主イエス・キリストは、十字架でいのちをお捨てになりました。それはひとえに、神が私たちに真実と誠実を尽くすためであったことに気がつきます。